慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	加田哲二著 経済価値論
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.5 (1921. 5) ,p.755(163)- 757(165)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210501-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り（二六〇頁）。然るに凡ての勞働者をして全生産物よりその自ら作出したる全價値を收得せしめよとの積極的意味に於ける全勞働收益權に至つては猶ほ細密の考究を必要とす。而してその結論を要約すれば、「全勞働收益權は…土地及資本の私有を承認する…今日の社會秩序とは納鑿相容れ難きものである。個別使用を伴ふ共有財産を規定する法律秩序に於ては、全勞働收益權は自然的分配原理である。併し共同使用を伴ふ共有財産の行はるゝ所の共産主義的に組織された社會に於ては、全勞働收益權の實行は、それ自身不可能ではないが、斯樣な結び付きに對する實踐的困難は非常に大きい。從つて此の如き社會に於ては生存權が財の分配の自然的基礎と認められなければならぬ」（二八二―三頁）而して「今日の社會的發展は」全勞働收益權の實現よりも「多くの徵候より推して考ふれば…生存權の實行に向つて居るやうである」（二八五）と云ふに在り。

Menger は唯物史觀を是認せず。歷史上の大事件の如何なるものも全然經濟狀態の影響を被らざるものなきも亦その如何なるものも單なる經濟狀態のみよりしては之を說明すべからずとなす（二〇九頁）と同時に近時屢々 Marxismus の精髓なりとして主張せらるゝ勞働者獨裁の說に左袒せざるものなり。蓋し「社會問題は政治問題のやうに一夜の間に解決せらるべきものでない。」今日の法律秩序に「必然起るべき變化は恰も吾々の今日の社會秩序が數百年の間絕えず封建制度を破碎壞敗し來り、結句唯の一擊で以て之を全廢することが能きる迄に至つたやうに、長き歷史的發展の方法によつて行はるべき」（二八五頁）を以てなり。而して此見解に對しては譯者森戸氏が漸く「多くの疑問を懷くに至」りしと云ふ（序文四頁）に拘らず、評者は今猶ほ之を棄つべき理由を知らざるものなり。今日一擊にして社會主義社會の實現すべからざるは猶ほ一擊にして封建制度の復活すべからざるが如しと信ずるを以てなり。

森戸氏の譯筆は周到精密原著に謂へるところ傳へて遺憾なし。嘗て森鷗外博士その飜譯「審美極致論」の凡例中に記して曰く「飜譯義を謬る、以て飜譯と稱するに足らず。義を傳へて正しきことを得ば、善きことは即ち善からん。未だ美を盡せりとは謂ふ可からず。若し能く筆墨の間、作者の口吻を髣髴するに至らば飜譯の能事畢れるに庶幾からん」と。今評者は平生歐文の書を讀みて其理義を解するも、原文の趣致を味はふこと甚だ不充分なるを嘆ずるものなれば、「社會主義思想史」が果して能く「飜譯の能事」を盡せりや否やを云ふこと能はずと雖も「義を傳へて正しき」の一事に至ては原著を併讀したる凡ての人と共に幸に之を言明して憚らざることを得るものなり。（一些事を指摘すれば、三四頁、二月革命假政府の宣言中「假政府はその屬する勞働者に人件費 le lase civile より一百萬フランを支給す」とあるは「王室費より一百萬フラン」とすべきものにあらざるか。）森戸氏は曩に雜誌「改造」（大正九年十一月號）に一文を寄せて Anton Menger の人物業績を論評すること甚だ詳細親切なりき。今氏に斯の如き良飜譯の業ある素より其處ならんのみ

（小泉信三）

加田哲二著　「經濟價値論」

東京國文堂發行
定價二圓五十錢

現時に於ける少壯有爲の經濟學者たる著者によりて公にせられし「經濟價値論」が熾烈なる研究心の結晶たると共に讀書界の眞摯なる要求を充分に滿足せしむる勞作たることに就きては、既に高橋、小泉兩敎授の序文中に裏書せられしを以て、評者は單に本著の內容に關し、之れが主要なる點を紹介し、以て著者の眞摯なる努力に報んと欲す。本著は著者が序文中に指摘せられし如く、今日に至る迄の經濟學上に於ける中心問題たる價値論に關する研究にして、其內容は前、後兩篇に分たれ、前者は著者自からの研究になる價値學說の史的研究にして、後者は墺太利學派の價値論を最も簡明精確に紹介せりと稱せらるゝ W. Smart, An introduction to the theory of Value の全譯なりとす。

蓋、現時に至る迄の經濟學の發達と價値論の發達とは略ぼ其軌を一にせるの觀あり、今假りに今日迄の經濟學を科學的構成以前の時代と之れが以後の時代とに區別し、前期に於ける價値論を以て後の時代に比する時は遙かに貧弱なりとの觀を免れず、即ち希臘、羅馬の時代に於ける價値論が頗ぶる斷片的たることは既に著者の云へるが如し、（頁一七）又た中世の如きも主として Justum Pretium を中心として學說の構成を求めしが如し、然るに後期即ち近世に至つて此方面の研究には著しき發展を齎らすに至り、即ち十七世紀の經濟論をして十八世紀の經濟學を化成せしめしと稱せらるゝ Locke の如き、彼れの需要供給價値說に一歩を進めしものと云はるゝ James Steurt の如き、或は近世經濟學の泰斗たる Adam Smith の如き、更に正統學派經濟學說の全伽籃を礎き上げしと稱せらるゝ David Ricardo の如き、又た彼れの勞働價値說を大成せりと稱せらるゝ Karl Marx の如き何れも此方面に對する最も顯著なる貢獻者なりとす、之れを要するに Petty, Locke に始まる客觀的價値論は Smith, Ricardo を經て J. S. Mill に於て完成の域に達し社會主義の經濟說に於ては Ricardian Socialismus を經て Rodbertus Karl Marx に於て其發達の頂點に達せりとなすが著者の近世的經濟價値論の概觀となす。（頁一四三）

次ぎに以上の兩傾向に對する反對說として利用價値說なるもの發生し、而して此方面の學說に於て特に重要視す可き人々を S. W. Jevons, Carl Menger, Léon Walras となす、即ち前二者は千八百七十一年に於て利用價値論を唱說し、之れに後るゝこと三年にして Léon Walra も亦た此說を唱道せしが、其後、Jevons の學說は英國に於て徐々に承認せられ、Carl Menger の故國たる墺太利は殆んど利用價値說の祖國たる觀を呈せしものなりとす、而して Walras に至りては嚴密なる數學的分析を基礎として Jevons よりも完全なる體系を後ちの經濟學界に提供せしものなりとす（頁一八七、一九四）只だ此利用價値說なるものが經濟學界に於て大なる勢力を有せしに不拘、其內容が妥協的なることは勢ひ社會主義者中より Marx に對する修正派なるものを生むに至りしが如く利用論者の中にも以上の利用說を以て滿足すること能はざるもの輩出し、殊に米國コロンビア大學教授 Clark は其雄なるものなりとす。

之れを要するに著者の現代に對する價値論觀は、之れを以て客觀、主觀兩說の折衷化せしものとなすと共に、將來、此折衷が利用へ歸るか費用へ復歸するかは今後の經濟學の取扱ふ可き問題たることを以てせり。（頁二二二八）

尙ほ後篇主觀的經濟價値論は吾人が前に擧げしが如く W. Smart, An introduction to the theory of Value の極めて流暢なる全譯にして之れが內容は（一）新版序文（二）第一版序文（三）緒言（四）價値の解剖（五）利用と價値との差異（六）價値の階等（七）限界利用（八）限界利用再論（九）補足財（十）主觀的交換價値（十一）主觀的價値より客觀的價値（十二）價格（十三）價格の基礎としての主觀的評價（十四）生產費（十五）限界生產物より生產費へ（十六）生產費より生產物へ其他附錄第一、第二より成り、價値論の最近傾向に就きて知らんとする人の必ず一讀す可きものなりとす。以上、吾人は著者として譯者としての加田君の勞を大となし普ねく價値論に對して興味を有する士の坐右に本書を薦めんとするものなり。（阿部秀助）

リカアド原著　**經濟原論**

堀經夫譯

岩波書店發行
四六版四五九頁
定價貳圓五拾錢

「凡そ飜譯については、謂はば印象的の譯し方と寫實的の譯し方と、二種の方法が在り得ると思はれるが、本書は、極めて神經的な寫實の方法に據つた。」（河上博士の序文　三頁）「リカアド經濟原論」は博士の所謂「極めて神經的な寫